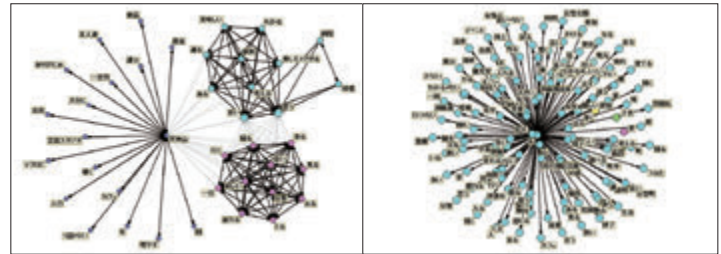


平成26年度の個々の活動の評価

本研究では、平成25年度に構築した仮説として、デザインとアートを原動力とした活動が、地域の活性化にどのように影響するかを検証し



ています。平成26年度は以下の個々のフィールドでの活動を対象に、参加者の意識調査等を実施しました。

そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014での意識調査

2014年は夕張市清水沢・旧北炭清水沢火力発電所～旧北炭送電線の道(鉄塔・朝日駅・唐松駅)～三笠市田代炭坑・運炭施設(石炭積み出しホッパー)の三拠点を活用して広域的に開催しました。アートの力で価値と記憶を蘇らせ、炭鉱の記憶と人々を繋ぐプロジェクトです。会場整備、設営も含めたアートイベントの運営、来訪者に対するガイドなど総合的な実践活動であり、アートによる地域再生のモデルと考えます。平成26年度の本研究では、来場者への意識調査を実施しました。

(主担当:上遠野敏)

奥洞爺ロゴデザイン・観光促進グッズの提案

本学の学生とともに、奥洞爺地域と奥洞爺牛のロゴデザイン、および壮瞥町の観光促進に関するグッズデザイン提案を行いました。地域住民を交えたワークショップや現地視察を通じて当該地域の魅力を確認・発見し、それを活かしてデザイン作業を進めました。未発掘の地域リソースの発見や地域のブランドイメージの確立などにつながる取り組みになったと考えています。

(主担当:石井雅博)

グリーンカーテン栽培による「まちのTSSデザイン」

札幌市南区芸術の森地区では「まちづくりセンター」が拠点となり、地域住民が交流しながら、グリーンカーテン栽培によるまちのTSSデザインを行なっています。3年目を迎えた昨夏は40世帯以上が参加し過去最高でした。地域交流の場(TSS)に積極的に参加した世帯はグリーンカーテンの繁茂状況も良好で、うち約半数が「グリーンカーテンは地域資源になる」と感じていました。まちのTSSデザインはさらに発展しそうです。

(主担当:齊藤雅也)

寿都町:風車アートプロジェクト (主担当:上田裕文)

「風の町」寿都で、風車が町の風景を作るアートプロジェクトを今年も継続、さらに発展させました。風車の「色」や「素材」などを、昨年度の住民アンケート結果を反映させ改善しました。教育委員会主催の「子供教室」として、小学生たちと風車作りを行い、お祭りに合わせて町の中に飾りました。町のPRポスターを作成することで、風車は、町の人が地域資源に気づききっかけだけでなく、「風の町」を町外にアピールするメディアとしての役割も持ち始めています。

平取町:鹿革商品開発プロジェクト (主担当:上田裕文)

地域の深刻な課題であるエゾシカの被害、見方を変えれば地域の資源にもなり得ます。地域ニーズに基づく鹿革商品の事業化を検討しました。デザインや商品機構、機能的評価以外の経営・流通に関する知識を体系化するため、特に事業計画・利益計画・資金計画について実践的な視点からのノウハウを体系化する全10回の「起業セミナー」を開催しました。また、そこから得られた知識に基づき、商品を「鹿革名刺」に絞りこみプロトタイプを検討しました。

五感を通して地域を伝える仕掛けとしてのお弁当開発

お弁当を開けると広がっている景色。地元の食材を使ったお料理の味と香り。QRコードを読み取る聞こえてくる海や川の音。お料理を食べ進めると出てくる探検マップ。新しい地域情報発信のプロジェクトとして、札幌市立大学と光塩学園女子短期大学の学生達が、喜茂別町民と寿都町民の協力を得てパッケージとメニューのデザインを考えました。これは、弁当購入者の食事時間を利用し、五感を総動員して地域情報を伝える、新しいツールの提案です。

(主担当:片山めぐみ)

短期居住体験日報のテキスト・マイニング分析

札幌に住む人が北海道内市町村で短期居住を体験し、逆に市町村に住む人が札幌で短期居住体験をした場合、居住体験者はどのような感想・思いを語るだろうか?そこから見えてくる真理を探るため、札幌市と壮瞥町を舞台に短期居住(タイム・スペースシェアリング)実験を行いました。ここでは、短期居住体験者の日報・週報などについて、テキスト・マイニング手法を用いて客観的に分析しました。体験者のコンテキスト(文脈)の理解から大都市と市町村の相補・連携の可能性を探ることが目標です。

(主担当:城間祥之)

研究フィールド

札幌市は全国で5番目の人口を有する北海道最大の都市。本事業では、芸術文化活動の拠点である札幌芸術の森にある「芸術の森キャンパス」を中心に、その活動を行ないました。

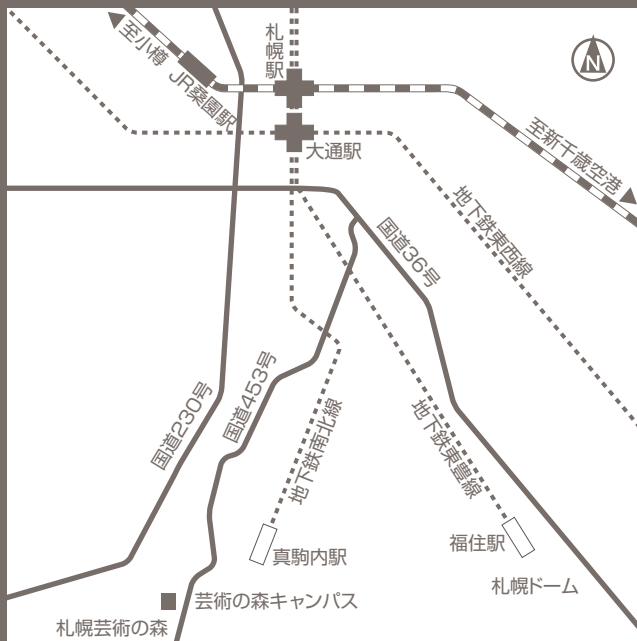


- [1]札幌市中央区・南区
- [2]夕張市
- [3]三笠市

- [4]寿都郡寿都町
- [5]虻田郡喜茂別町
- [6]沙流郡平取町
- [7]有珠郡壮瞥町

芸術の森キャンパス

〒005-0864
札幌市南区芸術の森1丁目

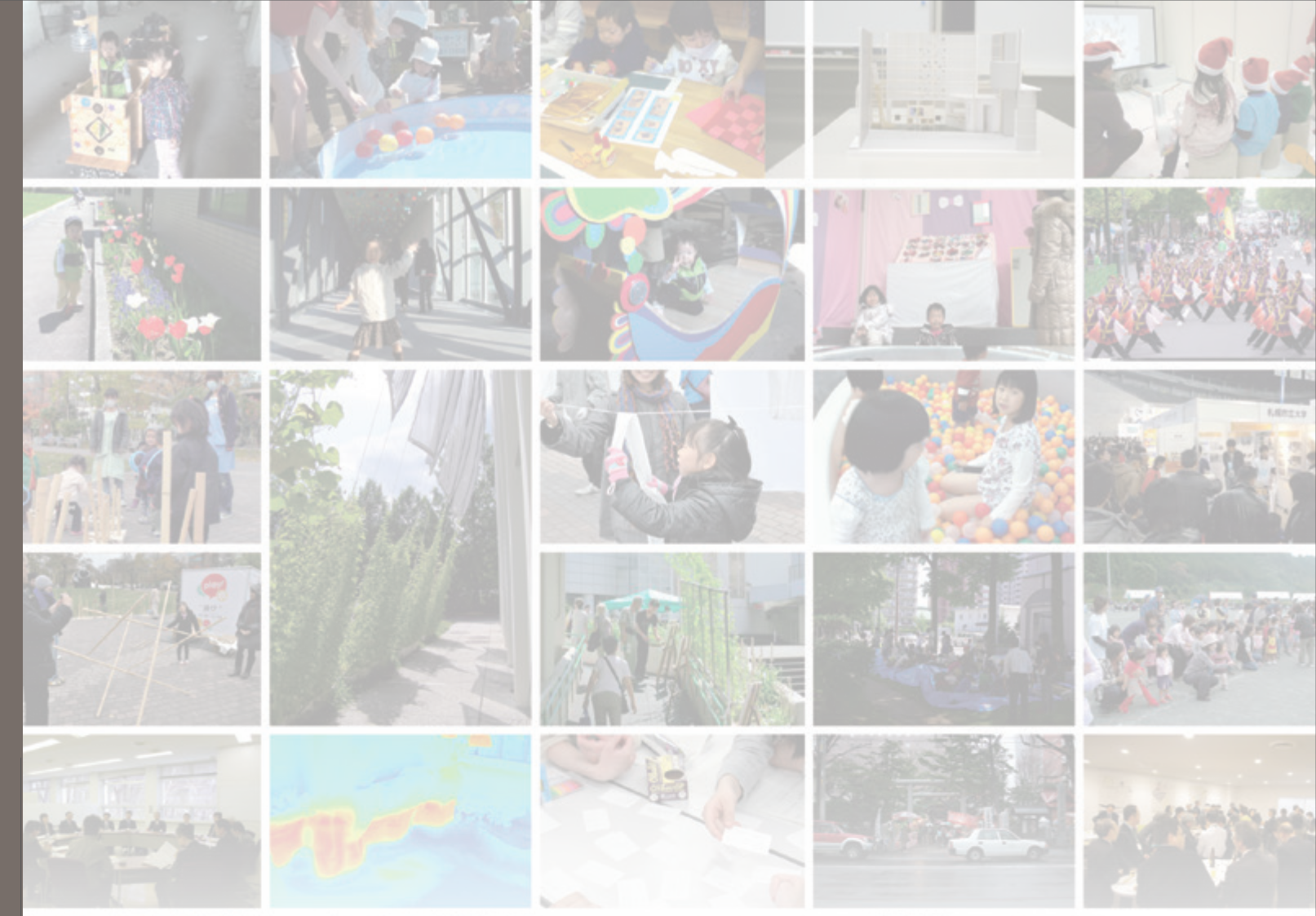


札幌市立大学 SAPPORO CITY UNIVERSITY

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科
Tel.011-592-2300(代表) Fax.011-592-2369
http://www.scu.ac.jp/

日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A) 研究課題番号:25242005

タイム・スペースシェアリング型地域連携による地域創成デザイン研究
研究代表者:蓮見孝(研究経費:34,100,000円)
http://tss.scu.ac.jp/



日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A) 研究課題番号:25242005

タイム・スペースシェアリング型地域連携による 地域創成デザイン研究

2014 report



札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

研究概要と平成26年度のコアプロジェクトの成果

研究概要

本研究は、地方市町村と大都市の双方における暮らしの質の維持、および魅力創出のための手法の構築を目的とするものです。

地域衰退の先行事例になる可能性のある北海道地域の地方市町村と大都市を対象に、定量的な調査分析を行い、それぞれの魅力と課題を明らかにします。この分析結果を踏まえ、井戸端寺子屋の運営を通じ、地域伝道師を育成し、かつ、地方市町村と大都市を相補・連携させる「タイム・スペースシェアリング」(以下TSSと略)手法による地域創成活動の実証実験を行います。また、「暮らしの満足度(ウェルネスデザイン)」評価によってこの実証実験の効果検証を行います。さらに、地域創成のための社会・文化・経済的支援に関する学問領域を「地域創成デザイン学」と名付けて体系化し、関連教育プログラム構築・実践を行います。

居住体験実証実験

5組7名が都会と地方に短期居住



【人の魅力】

「よそのの・わかもの・ばかも」などと言われることもあります。【人の魅力】が地域創成の核になります。アーティストに定住を促し、アーティストのアート活動が外部の人を喚ぶなどの事例が挙げられます。



【物の魅力】

固有の風土から生み出される農産物や工芸品、新規開発された特産品といった【物の魅力】が地域創成の核になります。駆除の対象として問題視されてきた鹿を、鹿革を使った商品開発ワークショップに発展させ、その開催を通して外部の人を喚ぶなどの事例が挙げられます。

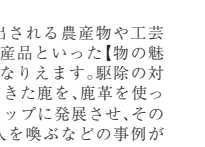


【場の魅力】

地域に古くから根付いている伝統芸能や祭りなどのイベントといった【場の魅力】が地域創成の核になります。廃校となった小学校校舎などで現代風にアレンジした祭りを開催することにより外部の人を喚ぶなどの事例が挙げられます。

【事の魅力】

例えば火山、湖岸の風景、強風、貴重な動物など、景勝地や歴史の遺産などの見どころといった【場の魅力】が地域創成の核になります。炭鉱跡地など地域の遺産と言える場面でアートイベントを開催し外部の人を喚ぶなどの事例が挙げられます。



井戸端寺子屋WS

延べ60名の3回に亘るワークショップ

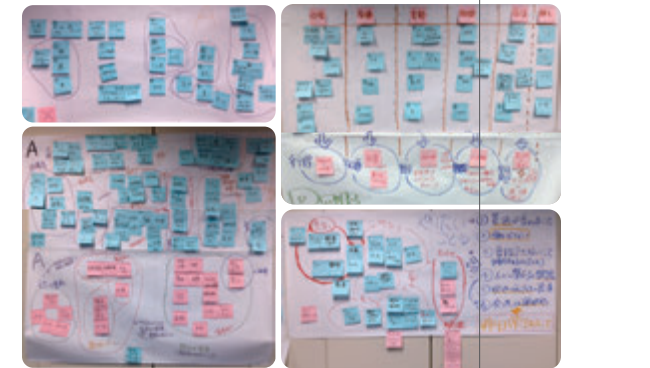


夏期 to 札幌
夏期 to 壮瞥
冬期 to 壮瞥



第1回WSの成果

札幌市民が抱く地方都市での短期居住のイメージ



「短期居住」のイメージ

交通機関	行程(時間距離)	期間	季節	居住施設
車	2~4時間	1ヶ月	夏~秋	田舎の家
列車or車	2~5時間	1~2週間	かわりめ	居心地の良さ

短期居住中にやりたいこと【非日常】

短期居住中にやりたくないこと【日常】

第2回WSの成果

札幌市民と壮瞥町民の協働による「魅力発見」



壮瞥町での短期居住時の「魅力」

- 自然で遊ぶ・自然に触れる
- 人とのふれあい
- ゆったり・のんびり過ごす
- 農業体験をする
- 巡る、散歩・散策する
- ちょっと違う日常生活

第3回WSの成果

札幌市民と壮瞥町民で考える「課題」

- 移動(交通)
- 目的
- 金銭・仕事
- 医療(介護)
- 情報
- 環境差

実際に短期居住を試みる際の課題

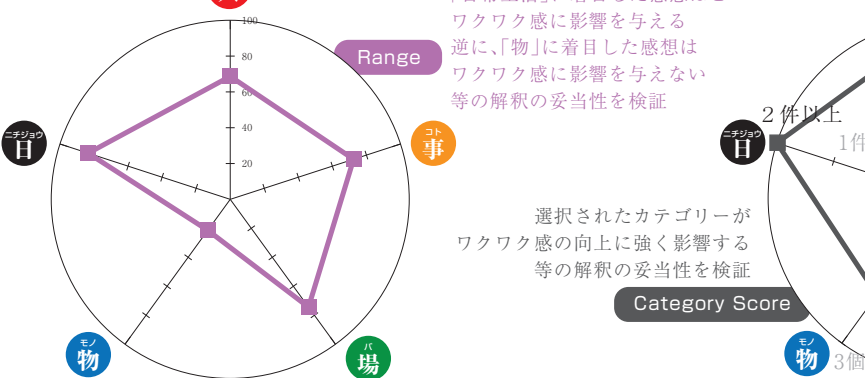


日常生活をいかにして継続するかが課題に

数量化理論I類(質的要素も今後検討)による5要素とワクワク感の関係分析

札幌市民(都会住民)の札幌市(都会)での短期居住の分析検討

SAPPORO-01 (49歳男性)2014年 9月16日~11月 2日

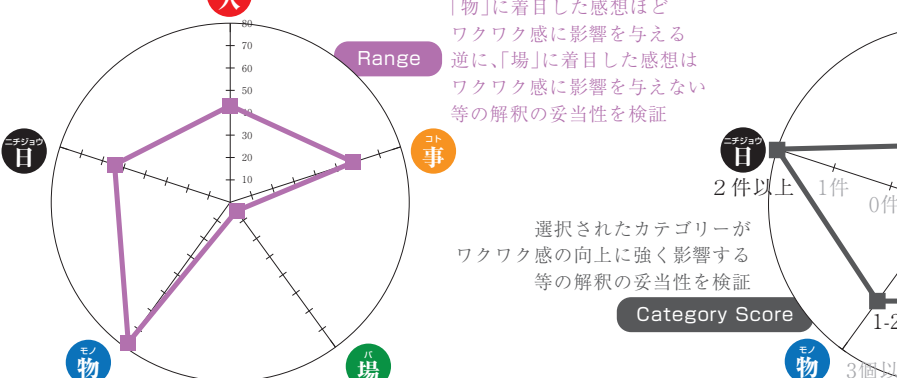


「日常生活」に着目した感想はどワクワク感に影響を与える逆に、「物」に着目した感想はワクワク感に影響を与えない等の解釈の妥当性を検証

選択されたカテゴリーがワクワク感の向上に強く影響する等の解釈の妥当性を検証

札幌市民(都会住民)の壮瞥町(地方)での短期居住の分析例検討

SOBETSU-01 (70歳男性)2014年 9月 2日~10月30日



「物」に着目した感想はどワクワク感に影響を与える逆に、「場」に着目した感想はワクワク感に影響を与えない等の解釈の妥当性を検証

選択されたカテゴリーがワクワク感の向上に強く影響する等の解釈の妥当性を検証

平成26年度の成果のまとめ

平成25年度の複数のフィールドでの活動をもとに、「人」「事」「場」「物」が地域の魅力を分類する4要素になるとの仮説を構築した。これを受け平成26年度は、短期居住を都会住民(札幌市民)、地方住民(壮瞥町民)に実際に体験して頂く『居住体験実証実験』(人事場物の4要素を対象とした日々の報告等)のタスクを課した短期居住実験の実施と、短期居住のあり方をWS(ワークショップ)形式で議論する井戸端寺子屋WS(全3回延べ60名の参加)を実施した。

「人」「事」「場」「物」の魅力は、各地域が持つものであり、4要素のうちいくつか欠けている地域も存在し、存在しない魅力要素を作りだすことは難しいことが明白となった。また「短期居住」を、地域創成を目的とした地域の活性化手法の一つと位置づけの際に、前述の4要素の魅力は、その地域のポテンシャルそのものであり、この魅力を短期居住者に体感してもらうための短期居住の仕組みづくりの可能性がWSで明らかとなった。また、実際に短期居住を試みる際の問題(日常生活を中断し、他地域で生活する際の問題)が「金銭・仕事」「医療(介護)」「移動(交通)」「情報」「環境差」「目的」等の要素から構成され、解決すべき課題であることが明らかとなった。

また実証実験の結果、短期居住の生活は、周辺の観光施設の訪問が日常生活の中心となった。したがって、観光施設の良否がワクワク感に直結することが明らかとなった。また、観光施設や食堂などのサービスは自分が生活している地域を基準に評価され、都会のサービスの充実度合いと地方サービスの充実度合いとのマッチングが課題である。加えて、日常生活が基盤となる為、基本的な住宅設備の充実が、居住中のワクワク感に大きく影響することも明らかとなった。このように、住宅設備の整備コスト・観光施設の充実コストが課題となったが、同じ施設を継続的に利用することで四季の変化や人との出会いなどを楽しくもろうといった工夫が必要(フットパスの整備は有効)であることが明らかとなった。

なお、本研究の反省点として、途中で決めた指定イベントは必ずしもワクワク感向上に寄与しなかった。研究色が強すぎたことは自己評価を行い、遊びの要素を盛り込む必要あるとの知見にいたった。また今回は短期のため、地元住民との交流が不足していた。サービス提供者と顧客という関係だけでは「人」の効用の検証が難しく、今後の課題となった。

最後に、平成26年9月、政府に「まち・ひと・しごと創生本部」が設置され、地方創生における若者への期待が提示された。本府の方針に従い「地域創成デザイン学」の体系化を目的とする本研究において、若者が地方に定住し、自身が主人公となり地方活性化を行う方法論もまた重要であり、平成27年度の活動を再検討する必要があるとした。

より参加者の印象を抽出可能な分析手法を次年度に検討予定

平成25年度の成果

スケジュール

1年目(平成25年度 成果概要)

平成25年度は、北海道 札幌市の中央区・南区、三笠市、寿都郡寿都町、虻田郡喜茂別町、沙流郡平取町でTSSの仮説構築を目的とした活動を行いました。この活動の中から、Art&Designの力に含まれる地域創成に役立つ4つの力と、地域創成のキーとなる4つの要素が仮説として構築されました。本仮説の検証が平成26年の課題となりました。

2年目(平成26年度 実施概要)

平成26年度は、北海道 札幌市南区、三笠市、夕張市、寿都郡寿都町、虻田郡喜茂別町、沙流郡平取町で継続活動を行いました。また、北海道有珠郡壮瞥町の全面的な協力を得て、夏期と冬期の札幌・壮瞥町間の5組7名のシェアリング居住実験を行うと共に、延べ60名の3回に亘る井戸端寺子屋WSを実施しました。実際の居住実験、WSでの議論を通して、二地域居住による「地域創生」のあり方に対する考察を行いました。

3年目(平成27年度 実施概要)

教育プログラム化/学問体系化